

## 国際文化シンポジウム「＜戦争の記憶＞をめぐって」開催報告

2020年2月17日（月）の13時30分から17時40分まで、東北大学大学院国際文化研究科棟第1階会議室にて、国際文化シンポジウム「＜戦争の記憶＞をめぐって」を開催した。キャロル・グラック著『戦争の記憶：コロンビア大学特別講義—学生との対話—』（講談社現代新書、2019年）を素材として、「歴史」と「記憶」をめぐる問題を幅広い観点から検討した。

最初に、東北大学大学院国際文化研究科博士後期課程の島貫悟および増渕佑亮が、博物館と「共通の記憶」の関係性や、「歴史」と「記憶」を用いた歴史教育の可能性を中心に『戦争の記憶』の意義および疑問点を提示した。

続いて「ニューズウィーク日本版」の小暮聡子記者が、キャロル・グラック教授によるコロンビア大学特別講義の現場に参加し、その取材に携わった立場から「コロンビア大学特別講義の現場とその出版について」と題した報告を行い、島貫氏・増渕氏の両名が提示した疑問にも回答した。さらにメディアの現場で働くという立場から「記憶におけるメディアの役割」についての報告も行った。

最後は討論と質疑応答となった。まず東北大学大学院国際文化研究科博士後期課程の林宜佳が、台湾の「歴史」と「記憶」を、4種類の「記憶の領域」を用いながら考察するとともに、会場全体に対して「戦争の記憶」をめぐる国家間対立の解決方策に関する問題提起をした。林氏の問題提起をめぐり会場から意見が出された後は小暮記者への質疑応答の時間となった。

本シンポジウムで提示した『戦争の記憶』に対する疑問は事前にグラック教授へと送っており、グラック教授の回答を小暮記者が紹介・解説した。会場における白熱した議論は、今後の国際文化学の新たな展望を拓くことになると思われる。

最後に、今回のシンポジウム開催を助成された日本国際文化学会および共催機関となった東北大学大学院国際文化研究科に対して深く感謝の意を表する次第である。

(阿部純)